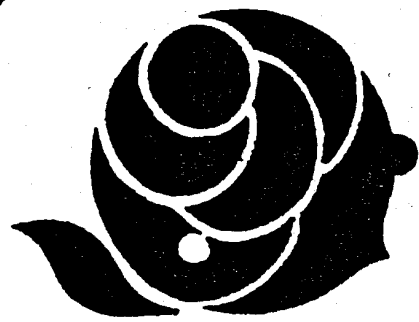


Rosa Pluma

ローザ・プルムラ

●茨城大学・大学教育研究開発センター



ニュースレターNo.27

目次

巻頭言

大学生の読書離れと日本の落日 … 1

より良い授業のために …… 2

キャンパス情報

ー各学部からー …… 3

聞いて欲しい私の意見

ー前学期を終えて …… 7

Voice

ー先輩から後輩へ …… 8

教養教育古今東西 …… 9

掲示板コーナー …… 10

つぶやき …… 10

(平成15年10月発行)

大学生の読書離れと日本の落日

教育学部長 菊池 龍三郎

十数年前、“知の巨人”立花隆氏は、『同時代を撃つ』の中で、“暗澹たる若者の活字離れ”は日本の凋落を予感させると嘆きました。不動産が異常に高騰し、例えば東京の土地でアメリカ全部が買えるなどのバブル話に皆が浮かれていた頃のことです。氏は、まもなく日本が落日を迎えることを、若者の読書に関する日米の圧倒的な差をもとに私達に問いかけたのです。

いわく、米国の若いビジネスマンは、週60時間以上も働きながらも、かなり重い内容の本を月に4冊以上読む。それでも彼らは、自分に何が欠けているかときかされると、決まって「知識不足」をあげる。片や日本の若いビジネスマンや大学生は、マンガばかりで本と

いえるものはほとんど読まない。これまで日本の強みは中堅層の知識レベルの高さにあるといわれてきたが、今後どんどんレベルが低下し、いずれ日本を衰退せしめる。まさに“売家と唐様で書く三代目”である。

人間はたくさんの文章を辛抱強くしっかり読むことによってのみ思考力がつく。言葉を離れてロジカルな思考力は育たない。緻密な思考は、実に読み書きによってのみ可能となる。言い換えれば氏は、この本の副題「情報化社会を撃つ」が示唆するように、本物の思考力はパソコンや携帯電話（その頃はまだ無かったけれども）によって決して育たないと強調したのです。

立花氏は茨大附属中の出身で、既に中学生の時から音に聞こえた読書家でした。学校の図書室を読破し、足りなくて近くの市立図書館まで征服しようとした話は有名です。それを高校生の昔から聞き及んでいた私には、氏の嘆きは一層説得力のある深刻な話でした。

そういう思いから私は、以前「茨大100冊」というささやかな構想を図書館で取り上げてもらったのですが、さしたる成果もなく終わりました。そこで今度は、茨城大学教育学部出身の教師は読書家で教養人が多いといわれたくて、今「茨大教育100冊」をカリキュラム改革の目玉の一つにしようと考えています。

より良い授業のために

大学教育研究開発センター

併任教官 佐藤 和 夫

昔々…皆さんが生まれるずっと以前、およそ三十年以上も前、現在共通教育棟1号館とか2号館とか呼ばれている建物もすでにありました（当時は教養部という組織に属していました）。その頃は教室内外の壁には「打倒」あるいは「糾弾」などという恐ろしげな文字を独特の書体で綴ったピラが所かまわずに貼られていて、ずいぶんと殺気立った雰囲気醸し出していました。

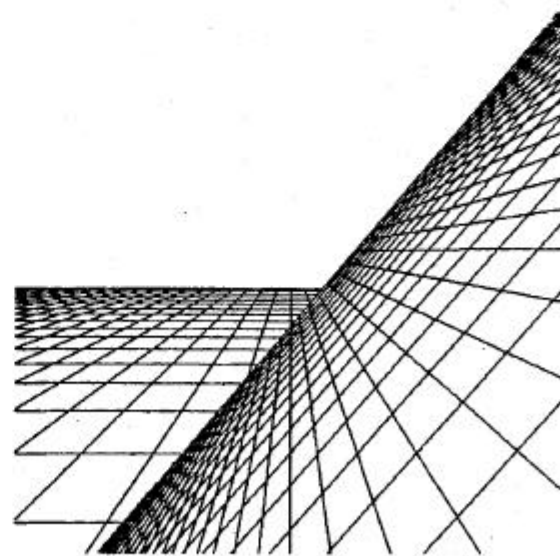
ところで今皆さんの目にはこの共通教育棟はどう映っているでしょうか。少なくとも私の目にはずいぶんときれいになったし、また設備も充実しているようにみえます。どの教室にもビデオ装置がありますし、マイクは使えますし、おまけにコンピュータなどという最新の装置の勉強もできます。さらには目に見えるものばかりでなく、授業の中味もずいぶんと工夫されるようになりました。とりわけこの数年、大学教育研究開発センターが教養教育の運営を担って以来授業をよくするための方策がさまざまに練られています。一つは皆さんが前学期末に各授業ごとに記入した授業評価アンケートです。これは後ほど集計され、統計的な処理を加えて各担当教官に通知されます。先生方は結果を見て、来年度の授業に役立ててくれるはずです。皆さんもどうか最後の時間の印象だけではなく、15回の授業全体を見渡した上で各項目に記入して下さい。

さらに学生諸君の目に見えないところでも工夫が行われています。例えばファカルティ・デベロップメント（教師の教育者としての資質向上の営み、略称：FD）という名の研究会です。主に教養教育を主導していく立場の大学教職員が参加します。昨年度は阿見の農学部を会場として他大学の先生の講演を始め授業評価アンケートや成績評価をめぐっての討論会などが行われました。

大勢の教官が参加する催しとしては教養教育シンポ

ジウムがあります。昨年度は「教養教育の改革」や「次世代の教養教育」を中心に熱のこもった発表が行われました。

今後も引き続きよりよい教養教育を目ざしてさまざまな取り組みが行われる予定です。けれども主役はやはり授業に参加する学生諸君です。成績評価は教員の仕事ですが、授業評価は学生の仕事です。正確な成績評価が勉学の励みになるように、真剣な授業評価は教員を動かして授業をより良くしていくのに直結します。記入の数が多くとも快くご協力ください。



キャンパス情報 —各学部から—

人文学部から

百鬼園先生の「外国語教育法」

— または内田百閒の「率直法」 —

内田百閒がドイツ語の教授をしていたころの文章。

その要諦は、言語神授説、人間と言語の不条理説、記憶力即ち下司根性説、参考書不役説、そして脅迫による教育法である。

外国語学習がむずかしいと言う学生に向かって、百鬼園先生曰く、「…外国語を習って、六ずかしいなんか云い出す位、下らない不平はない。人間は一つの言葉を知っていれば沢山なのだ。それだけでも勿体ないと思わなければならない。神様の特別の贈り物を感謝しなければいかん。その上に欲張って、また別のことを覚えようとするのは、神の摂理を無視し、自然の法則に反く一種の反逆である。外国語の学習ということは、人間のすべからざる事をするのだ。苦しいのはその罰なのだ。それを覚悟でやらなければ駄目だ。」

ドイツ語が特にむずかしいのは不公平ではないか、という学生の苦情に対しては、「公平も不公平もあったものじゃない。ただ自分のやろうと思ったことを一生懸命にやっていたら、それでいいのだ。我々が人間に生まれたのが幸福なのか、不幸なんだか知らないけれど、君が犬でなくて、人間に生まれたのと、君がこうして僕から独逸語を教わっているのと、みんな同じ出鱈目さ。ただそのときの廻り合わせに過ぎない。誰だって人間に生まれる資格を主張して生まれたわけでもなく、人間を志願した覚えもない。気がついてみれば人間だった丈のことさ。犬や牛から云わせたら、随分不公平な話だろう。黙って人間になり澄ましておいて、その癖、独逸語が六ずかしいから、不公平ですなんか云い出したって、誰が相手にするものか」と。

さらに文法の規則や単語が覚えられないという学生の悩みに対して、「覚えたことは忘れまいとする下司張った根性がいけないのだ。ただ覚えさえすればいい。

忘れるほうは努力しなくても、自然に忘れる。忘れることを恐れたら、何も覚えられやしない。第一、我々がもし忘れることをしなくても、生まれてからのことをみんな覚えていたら、とっくの昔に気違いになってしまってる。」

そして、参考書について、「参考書には色々あるさ…要するに参考書などに頼る必要はない。また読んでも役に立たない。語学の初步は脅迫に限る。脅迫する役目は僕が引き受けている。相手は君等だ。参考書は脅かさないから、駄目だ。」

これは戦前のことである。今から見れば、きっと「まっ、なんてッ……!」、「こんな教師……!!」あたりが大方の反応だろう。同感ではある。

が、無類のレトリシャン百閒ならではの真面目くさった表面の裏からにじみ出るユーモアについて微笑みたくなるのも否めない。レトリックとは元来、率直なものの言い方をある方向に幾分ずらすことにある。しかし皆が遠慮してなかなか言いたがらないことを敢えずばりと言ってしまうのもレトリックのひとつかもしれない。もしレトリックにイ「直言法」あるいは「率直法」などというものがあるとしたら、百閒のこの文章はその一例だろうか。少なくとも読者の意表を突いてはいる。そして妙な爽快感が残るのだ。引用の多い文章になってしまった。紙数制限の関係上あとは割愛する。

(人文学部教務委員長 鄭 基成)



教育学部から

去る7月26日に例年通り「オープンキャンパス」の名の下、高校生に対しての学部説明会が行われた。今年は例年になく盛況で、準備した教室では入りきれず、急遽教室を増やしての説明会となった。ともあれうれしい悲鳴であった。

私も大学側の一員として立ち会ったのだが、心に残ったことがあるのでここに記したい。

説明の一環として、教育学部学生による学生生活紹介コーナーでのことである。説明のために前に並んだのは女子学生3名と男子学生1名である。普段の学生の姿でということであったが、男子学生の出で立ち、カラフルなシャツに今はやりのだぶついたズボン、それにキャップを真横にかぶって、というものであった。正直私は戸惑った。高校生たちは制服で来ているし、引率の先生、父母たちもいる。そしてなによりもここは教育学部なのであり、高校生たちの間にもある種の戸惑いが広がっていくのが分かった。

説明は大学生活のを中心として進んでいったが、アルバイトの話になったとき、その学生が家庭教師をしていると言うと、高校生の方から「ほーっ」意外だというような声が控えめながらもいっせいにあがった。彼は「なにか変ですか」と受け流したが、私は「やはり」と思った。

話が進んでいくうちに、彼は「ダンス」に打ち込んでいること、外食をせず自炊をしていることなどを述べ、最後に高校生に対しての一言として、入学当初はそれ程とも思ってなかった大学生活のなかで、改めて自分の可能性を開拓し、勉強意欲を再燃させて充実した生活を送っていること、大学入学ということで自分の将来が決まるのではなく、それが自分自身を開拓していく新たな出発点であることを述べ、将来のことにまで触れて話を終えた。それはきわめて真摯な態度で、言葉も説得力のあるものであった。聞いている高校生たちにも最も印象深く残ったのではなかろうか。

私は聞きながら、彼の服装を気にした私が恥ずかしくなった。つまらない「教師根性」が私のなかに一瞬忍び込んだことを悔やんだ。その後で、あの溜息とも

声ともつかない高校生たちの「ほーっ」は、むしろ彼に対する共鳴の声ではなかったかと。自由さと真摯さと、彼が輝いて見えた。

(教育学部 橋浦 洋志)



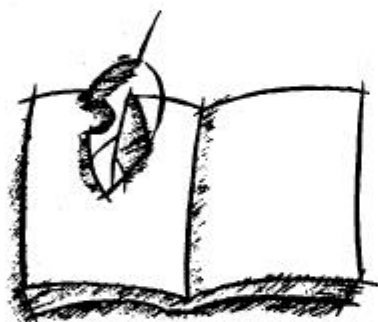
理学部から

ご存知のように、2002年度の入学生からA、B、C、Dの4段階評価からA+、A、B、C、D、Eの6段階評価に移行した。教養科目を担当された先生方は、成績評価を行なうときに学生の入学年度によって成績のつけ方が異なるので、ちょっとした混乱のもととなる。他大学には優、良、可、不可を採用しているところもあるが、4段階による評価は現在でも最もポピュラーな成績評価であろう。それを6段階にすることの利点は、より“正確な”成績評価が行なえることである。

“正確な”データに基づいて学生の就学状況に対して正しい判断が下せると考えれば、成績優秀な学生の表彰や奨学生の候補を決める判断資料、さらには就学不十分な学生への改善勧告に利用できる。きめの細かい成績評価に基づいて学生の皆さんに自分の到達点をより明確に理解してもらい、より適切な勉強指導が可能となれば結構な話であるが、4段階評価が6段階評価になってもたいしたことではないと思われるかもしれない。しかし、こうした流れの背景には、成績評価の厳格化・標準化、さらには、授業評価導入の考えがあることが、大学での教育に大きな変化をもたらす得る。授業のねらい、到達目標、授業計画、評価方法等が明確なシラバスを作り、小テストやレポートを行ない、出欠もきちんと取るということが授業担当者に当然のこととして求められるようになる。

理学部では、6段階評価が始まる前から教育の中身を充実するいくつかの取り組みを行なってきた。授業評価アンケートは、それなりに定着し、授業の点検に役立っている。就学不足の学生への指導も教務委員を中心に行なってきた。よりきめの細かい指導ができるように体制を整備しようと計画が進められている。最も重要なカリキュラムの検討は、組織改革との関係で議論されている。いまのところ6段階評価への移行は問題なく進んでいるように思われるが、授業をする側の意識や体制が“6段階評価”に対応しているかというと、必ずしもそうではないようである。シラバスの充実、授業回数の確保、出欠の徹底、学生への指導の強化等、検討すべき項目は多い。とりあえずカードリーダーを導入して後期から出欠管理が効率的に行なえるようにした。

(理学部教務委員長 藤原 高德)



工学部から

愁いつつ 岡にのぼれば 花いばら 荻村

これは、私の好きな句のひとつです。人それぞれの解釈があるようですが、何があるのかな、そして何の意味があるのかなと心配しながら岡にのぼってみると、そこには小さいながらも可憐な白い「花いばら」が咲いていた、というのが私の勝手な解釈です。「花いばら」は、岡にのぼるという行為によって、はじめて見つけることができるわけで、何もしなければ見つからない、というのはいかにも工学部的な発想でしょうか。

学生の皆さんが大学に入学してまず戸惑うのは、講義のとり方が今までとはまったく違うことだと

思います。高校での授業には、大学への進学のためという明確な目標があるものが多いですが、大学の講義が直接就職に役に立つわけではありません。シラバスには教官が作成した講義のねらいという欄がありますが、講義を生かすのはあくまでも学生の皆さん自身です。つまり、教官は皆さんが「花いばら」を見つけるために協力はしてくれますが、「花いばら」は皆さん自身が見つけるほかありません。

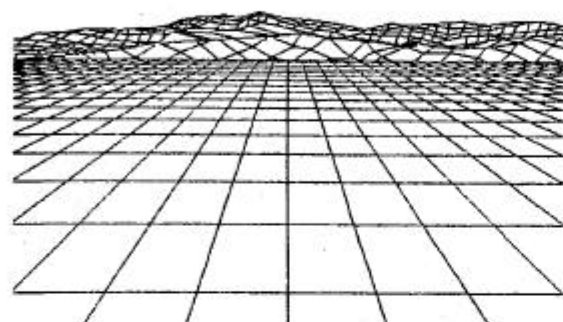
さて、工学部では、学生の皆さんを技術者や研究者の卵として社会に送り出す責務があります。科学技術は日進月歩ですが、大学1年生で学ぶ自然科学系の基礎科目は40数年前の私の大学入学時とほとんど変わっておりません。専門的なことを勉強しようと思って大学へ入ってきた学生の皆さんにとって、一見専門とは関係のないように見える科目を勉強させられるのはつらいことかもしれません。しかし、自然科学は岡にのぼるように一步一步積み上げていくことによってはじめて習得できる学問であり、基礎となるところは時代が変わってもそんなに変わらないということなのです。多くの学科では、自然科学系の基礎科目を実際に応用するための学力を養うため、2年生で演習や実習の時間をとっています。研究や技術開発が先端的であればあるほど、基礎科目の習得が不可欠であることを十分認識してください。ノーベル医学生理学賞を受賞した利根川さんの学生時代の専攻分野は物理化学でした。物理化学を勉強していたことが、専門分野での利根川さんの画期的な発見の端緒になったことはよく知られています。

この40年間に、産業界では大きな変化がありました。産業分野の垣根がなくなり、エレクトロニクスがバイオやロボットをやったり、化学会社が住宅産業に進出したりして、いわゆる「つぶし」のきく人材が要求されています。そのためには、いろいろなことに好奇心をもって挑戦するチャレンジ精神をもつと同時に、各専攻分野に共通する自然科学系の基礎科目をしっかりと習得して自分なりの「花いばら」を見つけてください。あとで、勉強するのはきわめて大変なことですから。

最後に、大学は独立行政法人化という荒波の前にさらされていますが、冒頭の句にあるように、まわり道

であっても着実に目標を達成することによって、小さくてもしっかりと地面に根を下ろした「花いばら」が咲く茨城大学になってほしいというのは、私たち教官の願いでもあります。

(工学部教務委員長 小野 勝道)



農学部から

先日、県内のある高校でプレカレッジの講師として講義をした。現役高校生相手の初めての講義にややとまどったが、高校側からの「受験対応ではなく、大学の雰囲気を感じる教養的な講義で」との申し出により快く引き受けた。講義内容は高校側からの依頼により「動物にも感情はあるか」といった理系・文系共通のテーマであり、私が専門としている動物行動学とも部分的に重複していたことから、「物言わぬ動物の感情をどうやって測定するか」についての研究の歴史と最新の成果を紹介した。

当初、「大学受験が当面の課題である高校生が、教養的な講義を聞いてくれるのか」と心配であったが、階段教室いっぱい集まった100名を越す高校生達はみな熱心にノートを取り、多くの質問が寄せられた。中には「動物に自我の芽生えはありますか?」という、動物心理学の分野で今世界的に論争となっている問題について質問し、私を困らせた女子学生も存在した。また、講義後に書いてもらった感想では皆一様に「最初は興味がなかったが、知ることの楽しさが少し判った」、「早く大学に入ってこういった知識を吸収したい」など、教養的知識を渴望しているようであった。

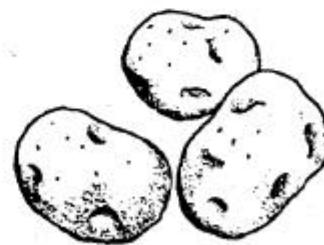
そう。純真な高校生が感じたように、「教養」とは本来「知的好奇心を満たす」ものなのである。専門教育

がある狭い専門分野での「知っておかねばならない知識」を教えるのに対して、「教養」は「知ることの楽しさ」を教える教育と言える。

本学では現在高校との「接続教育」の実施を検討している。「接続教育」とは、専門教育に入る前に未履修者や成績不良者に行ういわゆる補講のようなものであり、研究の高度化や入学者の多様化に対応するためには必要であることに疑いはない。しかし、真の大学人養成のためには専門教育への動機付けでもある「知的好奇心の養成」、すなわち「教養教育」の拡充・発展こそが重要と考える。

おそらく皆さんも上記の高校生と同じく、大学入学時には「どんな講義が聞けるのか」と胸を躍らせていたことと思う。その時の気持ちを思い出し、積極的に「自分はこんな講義が聞きたい」と担当教官や教務委員までリクエストしてみてもはどうだろうか。大学の構成主体である皆さんの声を汲み取る努力を、本学はきっと最大限払ってくれると思います。

(農学部 応用動物行動学研究室 安江 健)



聞いて欲しい私の意見 —前期を終えて—

張 替 美 樹 (人文学部1年)

入学してから、早くも3ヵ月が経った。私は、この3ヵ月の間、何をしていたのだろうか。

入学した最初は、大学生活に慣れることに精一杯だった気がする。電車での通学、慣れない授業、アルバイト、サークル……新しい環境に自分の落ち着ける場所を見つけたかった。

しばらく経つと、友達も出来、少しずつ大学生活にも余裕が出てきた。授業もただ講義を聴くだけのものもあったが、興味を持って取り組めた。しかし、どこか満足できない気持ちがあった。

大学は、もう社会の一部だと考えている。そこでは、自分で考えて主体性を持って行動することが大切なことであるが、今の私には欠けている部分かもしれない。ただ、決まった時間に大学に来て、授業を受けて、また家に帰る……毎日がそのくり返しで、ただ時間だけが過ぎて行ってしまう。前期はそんな感じで終わってしまった。

このまま4年間で過ごしてしまってはもったいない。自分が何をしたいのか。何をすべきなのか。もう一度、考えて行動していこうと思う。

そして、大学の中の世界だけに自分を閉じ込めたくはない。もちろん、大学での講義も友達と遊ぶことも大切なことである。だが、自分の視野を広げ、成長させるためには外の世界も見ることが必要である。地域のイベントに参加したり、ボランティアをしたり、国内外旅行をしたりなど方法は様々である。そして、そこでも自分で考えて行動するという主体性が求められる。自分から積極的にアプローチしていくことが大切である。

「大学は、大学に期待するのではなく、自分に期待するものだ」とある人に言われた。この4年間で自分が何が出来たのか、今から楽しみである。

矢 野 由 梨 (農学部1年)

あっという間に、前期が終わってしまった。思い返せ

ば初めての事ばかりだった。新しい土地、新しい学校。この茨城大学を選んで良かったという思いは強いけれど、さみしさや不安が未だ残っている。

新しい学校生活は、高校とは全く違っていた。朝は自分で起き、朝食を取り、学校に行く。授業は、曜日によって数が違う。出席は本人の意志にかかっている。試験は、はっきりと試験範囲が提示されている訳ではなかったりと、不安というよりは恐怖に近かった。今までの人生で、これほど野放し状態にされたことがなかったのも、戸惑う事ばかりである。

1年生である私が取っている授業は教養科目が中心であり、大学では専門科目ばかりを学ぶものと思い込んでいたので、教養科目をこれほど多く受けることができることに驚いたが、私は嬉しかった。なぜなら、他学部の先生の授業を聞くことは自分の視野を広げることであり、単に面白いと思うからだ。今後、教養科目を取る機会は減っていくだろうから、1年生のうちには意識して他学部の先生の授業を選ぼうと決めている。昨年からは、評価の仕方が変わったので悪い成績をとってしまったらという不安はあるが、色々な科目に挑戦したいと思っている。教養科目の中で、特に、習熟度別英語の授業に驚かされた。初めにテストを受け、成績によってクラス分けが行われる。私は、この方法に賛成である。英語は得意・不得意があり、私自身、英語に対する苦手意識が強いため、同じレベルの人達との授業は幾分気が楽だからである。授業内容は、文法よりも会話に重点を置くものであった。クラスの人達と話す機会が多くあり、楽しかった。

私は、大学に通うため一人暮らしを始めた。大学生になり、茨城に住んでみて、改めて故郷の良さ、親の有り難さを感じるようになった。親には経済的な面で負担をかけており、親の気持ちに応えたいと考えている。しかしながら、今はどうすれば、何をすれば良いのかが解らない。だから、取り敢えず目の前の事に誠実に取り組みたいと思う。毎日の授業を確実にこなし、遅刻も欠席もしたくない。そんな心持ちで後期に向かおう。一つずつ着実に。

Voice -先輩から後輩へ-

中 野 圭 (教育学部2年)

茨城大学に来て二年目、私の所属する教育学部国語科にも初々しい1年生がたくさんやってきました。期待に胸膨らませ、戸惑いながらも、やる気に満ち溢れていた一年前の自分を彼らの姿に重ねつつ、懐かしく思い返します。1年生の皆さんも入学したての頃は、単位のことや、どんな授業を履修したら良いかということなど、初めて直面するシステムや自分の選択に対する責任感に戸惑いも多かったことでしょう。そして、大学生活の前期を終えた今、そんなシステムにも慣れ、大学生としての自覚や、将来に向けての具体的なプランを持ち、初めて余裕がでてきた頃だと思います。そのような時期に、不束ながら先輩として皆さんにアドバイスしたいことは、その余裕に甘んじて怠け癖が付かないように気を付けて欲しいということです。私自身、初めこそ授業やサークル活動に熱心に打ち込んでいましたが、大学生活に慣れたことや、長い夏休みを過ごしたことで余裕が出来たせいか、後期の授業をずいぶん疎かにしてしまい、成績が下がってしまったということがありました。怠け癖を付けて後悔することがないように、自分がやりたいことのビジョンをしっかりと思い描きながら、常に自分を奮い立たせる姿勢が必要だと思います。そのためには、同じ道を目指す友達や先輩とよく情報交換や相談をし合い、休日などを利用して、興味のある分野に関係するイベントやボランティアに積極的に参加していくことが大切です。また授業や試験を有利にし、効率良くこなしていく方法も知っておくと良いと思います。その方法の一つは学科内でネットワークを作って、掲示板情報や試験の情報などを交換できるようにしておくこと、もう一つは、学科の先輩と親睦を深めて、様々なアドバイスを得ることです。私はこうした方法で、授業中に聞き逃したことをメモし忘れたことを友達と確認し合ったり、先輩から、試験のための勉強法を教わったりなどして、試験を乗り切ってきました。自分では対処しきれないことも、友達や先輩の協力があると、すんなり解決で

きることが多いと思います。勉強に限らず、様々な場面においてつまづいてしまった時や、悩んでしまった時は、信頼できる友達や先輩に相談してみてください。先輩という立場に立った私達2年生、またその上の先輩達も、今までの大学生活から学んだことを、1年生に出来る限り伝えていき、同じ道を目指す者として互いに高め合っていくことを願っています。

嘉 代 和 年 (理学部2年)

あっという間に夏休みが過ぎ、後期になりました。1年生の皆さん、楽しい夏休みを過ごせたでしょうか。後期ということで、もう大学の生活には慣れていると思いますが、先輩から後輩へ、ということで、アドバイスになるかどうかは分かりませんがいくつかのことを書こうと思います。

後期になると、決まってかどうか分かりませんが、1限目の授業がしんどくなります。最初は夏休みの生活のなごりで朝がつらくなる、ということと、冬に近づき徐々に寒くなる、ということですね。これらをどうクリアするかが一つのポイントだと思います。

また、専門の授業もどんどん難しくなっていくことだろうと思います。ここで大切なのは、分からなくなったらその時にきちんと質問することです。自分もそのままだとしまい、失敗してしまった、という記憶があります。とくに1年次の専門とかは後々大事になる基礎のことをやるのできちんと理解しておくことが大切だからです。

次に、教養の授業のことです。教養の授業を、前期落としてしまったり、履修していなかった、という人もいると思います。教職の都合で2年次にも教養の授業をとらなければならないという人もいます。個人的にですが、教養はある程度、1年のうちに済ませておいたほうが良いと思います。2年次になると専門が増えて、テストとかの時期、大変になるからです。

最後に語学のことです。自分の学科は未修外国語が4単位必要だったので、1年次の語学の授業は落とすわけにはいきませんでした。だから大変だったことを覚

えています。やばいかな、と思う人はがんばってください。

後期には茨苑祭もあったり、まだまだ楽しいことがいっぱいあります。大学生活を楽しんでくださいね。

教 養 教 育 古 今 東 西

勝 二 博 亮 (教育学部)

これまでの短い教員経験と私の学生時代の記憶を呼び起こしながら、教養教育についてお話してみたいと思います。私は現在教養科目のうち、人文の分野で心理学を担当しています。心理学は人気が高く、受講生は毎年大変多いのですが、心理学という学問は非常にバラエティに富んでいるので、学生が期待する心理学のイメージとこちらが伝えられる心理学の知識との間にギャップが生じてしまうこと時々あります。それゆえ、「何を話すべきか」と講義内容に迷ってしまうことも多いのです。

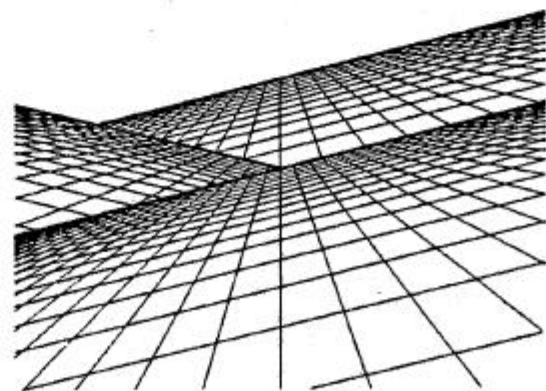
しかし、その迷いは、「心理学」という学問の性質からだけで起こっているわけでもないようです。教養科目の場合、受講する学生は様々な学部学科から構成されますし、受講生の興味がどの程度あるのかも推定できません。ですから、講義には期待と不安を抱きながら、教養教育棟へと向かっていきます。教室に入ると、専門教育で感じる教室の雰囲気とはやはり異なります。

そういえば、自分が学生の頃はとうだったのだろうか？ ………私が、学生の頃には、教養科目はかなりの数を受講しなければならなかったと思います。しかし、その内容まではなかなか思い出すことができません。ということは、私が今やっていることは一体何なのだろうか？ 何時間も皆さんの前でお話をするのですから、きっと少しは（無意識に）記憶に刻まれていると思うのですが、一生を通じてその記憶が呼び起こされることはあるのだろうか？ と不安になってしまいます。この点は、専門科目についても同様にいえることではあります。

しかし、人間というのは勘違いすること多いよう

です。たとえば、私は障害児に関する科目を専門として担当していますが、この前、テレビで「自閉症」という言葉を聞いた場合に、一般社会では「心の病気」とであると勘違いしている人が多く、「脳機能障害」という正しい認識ができるものは10%を少し上回るくらいでした。つまりは、これをお読みになっている方のほとんどは「へえ〜」とってしまうのでしょうか、障害児教育に少しでもたずさわった事がある人ならば、「え？ そんなことも知らないの？」と感じてしまうでしょう。学生時代に講義の中ではじめて得た知識なのですが、今の私にとって、自然と身についたような知識としてしか感じることはできません。そして、一般社会ではいまだに誤解されていることに驚きさえ感じてしまいます。本当に自分の知識として身につけてしまったものは、どうやら昔から知っていたかのように脳の中では刷り変わってしまうのでしょうか？

私自身としては、なにか一つでもいいので、そのような形で皆さんの記憶に残してもらえれば、という思いがあります。暖かく見守っていただければ幸いです。



掲 示 板 コ ー ナ ー

前学期の成績について

後学期当初に、各学部学務係（1年次生は学生課教養教育係）より「成績通知表」が配布されました。この通知表は、前学期の成績を参照するだけでなく、今後の履修計画を立てる上で大変重要ですので、各自必ず受領してください。

なお、この通知表で、自分が履修した科目が全て記載されているか、間違った科目が記載されていないか、

必ず確認してください。誤りなどがある場合には、速やかに各学部学務係（教養科目については学生課教養教育係）に届け出てください。誤ったまま放置しておくと、卒業時に不利な状態が生じる恐れがありますので、注意してください。ただし、単位を取得した科目を取り消すことはできません。また、記載されている科目の成績に対し、不服や異議、質問等がある場合には、担当教官に直接問い合わせてください。

つ ぶ や き

暑い夏の間の期末試験は学生にいつも、暑くて考えが集中できない、と文句をいわれてきたのに、今年は冷夏で暑く感じなかったせいか文句をいわれることなく、試験を終わることができてよかった。

しかしながら今年の夏は10年来の異常気象、冷害で、東北、北海道が不作とのことで、農家の方々、農業に関係しているひとたちには困った天候不順になってしまったことだろう。

設置基準の大綱化とともに、設置基準が大幅にゆるやかになり、大教センターとなり、教養科目の授業計画がたてられている。

そして、その多くの仕事を少数の教職員がやって

いるようにみえる。

また、限界に達しているようにみえる。

教育は効率で計れるようなものでないし、短い年月のあとで、評価できるものでもないから、事業所などとよんでいる改革などは悪い結果になるだろうということは現場で長く教育に携わった人々には容易に推察できるようにおもわれる。

決定されたいまは、承認の必要ないところは多いとおもわれるから、いろいろな改革、改組をなんでもしたほうが生き残れるとおもうのだが、……そうもさせはしないのだろう。

（高野 勝男）

発行日 平成15年10月
発行者 茨城大学 大学教育研究開発センター
水戸市文京2-1-1
029 (228) 8415 (学生課教養教育係)